

研究発表 15:00-17:00

第1室～第6室（メディアセンター9階・10階）

第1室（メディアセンター9階・ゼミ室1） 司会：篠田裕（徳島文理大学）

- ①日本語作文における接続詞・接続助詞使用の特徴
－韓国人学習者の男女比較－ 関山聡之
(釜山外国語大学)
- ②ペア会話を中心とした中級会話クラスの実践報告 吉金秀基
(釜山外国語大学)
- ③苗代川地方伝来の朝鮮語学習書類の日本語について 片茂鎮
(檀国大学)

第2室（メディアセンター9階・ゼミ室2） 司会：崎村弘文（久留米大学）

- ①韓瑞大学（韓国）日本語科における日本留学意識調査
(How many students want to go Japan to study?) 公文素子
(韓瑞大学)
- ②新井白石と朝鮮通信使との交流について 鄭應洙
(南ソウル大学)
- ③高麗後期の漢詩文に見える自我認識と他者認識について
－扶桑の見える漢詩文を中心に－ 金泰燾
(韓瑞大学)

第3室（メディアセンター9階・ゼミ室3） 司会：長谷部陽一郎（同志社大学）

- ①Jackendoffの言語モデル変遷 大岩秀紀
(長崎外国語大学)
- ②英語教育の可能性をジョン万次郎の生涯にたどる
－グローバルからローカルへ－ 堀口誠信
(徳島文理大学)
- ③新島襄のアメリカ体験
－ローカルからグローバルへ－ 石崎一樹
(徳島文理大学)
藤岡克則
(徳島文理大学)

第4室（メディアセンター9階・ゼミ室4）

司会：三浦秀松（徳島文理大学）

①『もののけ姫』の自然観について

北村賢介
（九州大学）

②上海の李香蘭—衣装とパッシングのナラティブ

吉岡愛子
（上智大学・青山学院大学
非常勤講師）

③心の支援の構造に関する考察(2)

—宗教的アプローチとカウンセリング的アプローチ—

佐藤静
（宮城教育大学）

④海外日本語教育実習における模索

（Groping for teach-practice in oversea）

奥村訓代
（高知大学）

第5室（メディアセンター10階・ゼミ室1）

司会：北林利治（京都橘大学）

①観光外客誘致の取り組みに関する一考察

—北海道ニセコ地域の成功例から—

伊藤優子
（育英短期大学）

②小学校英語必修化問題に関して

高橋強
（育英短期大学）

③探偵としてのダゲレオタイプスト

—Nathaniel Hawthorne 作

The House of Seven Gables の場合—

中村善雄
（長岡技術科学大学）

④学生の学習モチベーションを高める試み

熊抱ゆかり
（福岡大学）

第6室（メディアセンター10階・ゼミ室2）

司会：伊藤豊（山形大学）
長谷川一年（同志社大学）

①Organic Farming as Cultural Action:

A Comparison of Japanese and U.S. Organic Agriculture

マーク・フランク
（敬和学園大学特任講師）

②日中の輸出入に対する相互認識からみた両国の

文化交流観—北九州市と大連市の大学生を調査対象として—

岩松文代
（北九州市立大学）

③ハルビンと文廟

藪田謙一郎
（同志社大学嘱託講師）

④フランスにおける異国趣味の文化表現—モンテスキュー

『ペルシャ人の手紙』から21世紀ジャポニズムまで—

吉田 静
（羽衣国際大学嘱託講師）

シンポジウム
グローバル化とこれからの日本
「グローバル化を定義する」

藤岡克則（徳島文理大学）

これからの日本社会がグローバル化にいかに対応しなければならないかを考える手がかりとして、駄田井氏の「グローバル化と日本の経済」・丸井氏の「ドイツ南西部のエコワインの事例」という2つの事例をとりあげるが、それに先立ち、「グローバル化」とはどのような概念であるのかを再検討したい。

グローバル化（glocalization）とは“globalization”と“localization”の合成造語であるといわれているが、それぞれが目指す方向はまったく逆のベクトルを向いている。それゆえに、グローバル化ということばの解釈も必ずしも一定であるとはいえず、その解釈のずれから生ずるアクションも違った形で現れているのが現状である。

そこで、グローバル化が何を意味するのかを考える上で、再度“globalization”と“localization”が社会現象の中でどのように作用してきたのかを概観することによって“glocalization”という語の意味を再確認する。

“globalization”は“internationalization”と対立する概念である。そこには、「国家」という境界が存在するのかもしれないのかという大きな問題が含まれている。同時に「国家」の境界（あるいは規制）を取り除くことにより、社会・経済・文化・環境対策などさまざまな領域で「統一化」という現象が生じてくる。

一方、“localization”は“regionalism”という概念と深く関係している。どちらも「地域」に目を向けたことばであるが、“localization”は国家の「内側」に目を向けた変化であるのに対し、“regionalism”は国家の「外側」にその変化のベクトルが向いている。地域分権が強化され、各地域の「自立」的發展を目指すことは“localization”の一つの現れであるが、それぞれ「自立」した地域がネットワークを構築し連携してゆく方向性は“regionalism”という現象になる。そして、地域が連携し世界を動かしてゆこうという発想が、「開放的リージョナリズム」である。

グローバル化とは“globalization”と“localization”の合成造語であると単純には定義できない背景に、“internationalization”との対立や“regionalism”との関係が存在している。したがって、グローバル化を定義する上で、グローバル化のもつネガティブな影響と、ローカル化／リージョナリズムという関係を考察することが重要であるといえる。

シンポジウム
グローバル化とこれからの日本
「グローバル化と日本の経済」

駄田井正（久留米大学）

グローバルという言葉自体、10年以上前から使用されてきたが、例えば、日経新聞社が「日経グローバル」という週刊新聞を発行するほど、ここ何年かで定着するようになった。周知のように、グローバルは、global と local との合成造語であるが、ここで重要なのは、ローカルの大切さの再認識にある。現在グローバルの波が凄まじい勢いで押し寄せてきているが、この結果その副作用が様々な方面でおきてきている。

ことグローバル化に関しては、現在の人類の祖先はアフリカの一角で生まれて、それが何万年かけて全世界に広がったといわれているので、グローバル化志向は人類のDNAに刻まれているのかもしれない。縄文時代でも想像以上の広い交流域があったといわれているし、アレキサンダー、カエサル、ジンギスカンなど本能に駆られるように世界帝国を築いている。

近代化というのは西欧化であるとする、近代のグローバル化は西欧諸国の勢力拡張と関連し、大航海時代に始まった。彼らは、胡椒・茶・木綿を求めてインド・中国をめざし、その対価のために金銀を新大陸やアフリカに求めて争った。結果は、資源の略奪であり、自然環境が破壊された。

産業革命は、グローバル化に拍車をかけたが、イギリスで始まったのは、木材資源の不足や羊毛業の不振という逆境を克服しなければならなかったからである。これは、化石燃料の使用と生産工程の機械化ということで克服された。蒸気機関は輸送革命を起こし、大量生産が有利となった。重厚長大時代の始まりであり、環境とローカル文化の破壊の時代の始まりである。

明治維新に始まる日本の近代化は、工業化であるが西欧の勢力への対抗としての富国強兵政策の一環として進められた。戦後の日本は、工業立国として経済大国の地位を築いた。しかし、日本が工業立国への道をひたすら走っているとき、アメリカ、イギリスなど先輩の先進国は、知識・情報・文化を資本としてサービス・ソフトが基幹となるポスト工業社会へと脱皮した。1992年からの「空白の10年」は、工業社会からポスト工業社会への転換を試行していた時代である。安部首相の「美しい国」は、内容に乏しいものであるが標語としては間違っていない。

ポスト工業社会の資本である文化は、ローカル性に培われたものでないと創造性に乏しい。持続可能な社会を形成するには経済と環境を両立させなければならないが、環境は多様でありその保全はその地域に培われた生活文化と深くかかわる。また、グローバル化はボーダーレスであり、国境でガードされていた不都合は、地域でガードしなくなってきた。地域の自律と自立は、持続可能な地域の形成に不可欠である。Think globally, act locally.

シンポジウム
グローバル化とこれからの日本
「グローバル化と地域の価値：ドイツ南西部のエコワインの事例から」

丸井一郎（高知大学）

1. エコワインの杜氏パウリン・ケップファー（Paulin Koepfer）氏曰く

食えるときに「早く安く」がいいか、スローフード運動のように、地域性の評価という立場に立つかは、さしあたり人々の判断次第である。つまり、目的地にさっさと到着するか、ゆっくりと眺めながら達するのが好みかは、人によって異なる。グローバリズムは、経済（利潤）のことだけでなく、すべてを全地球的に考えることが必要だという点を喚起する。なるほど農業・ワイン生産は、土地に結びついていることから、よそに移動することは出来ない。しかし、実はその中にこそ未来がある。食と農の危機については、ドイツでも同じで、二極分化が起きている。健康と味わい深さか、早く安く（ファストフード）、電子レンジ文化か。

グローバル化への抵抗あるいは対抗文化としてのスローフードと、いい品質、自然・安全なもの、自然を壊さない、持続性の評価という、この両陣営が一致しているところが、いいところである。ワイン生産者の立場からは、良質で自然・安全なものというのは、当然のことである。楽しむためには時間が必要であるし、多くの人と共に行うことが必要である。つまり、「楽しむ」とは、コミュニケーションであり、生活の文化である。

品質の持続性が問題であると考えている。ブドウの味をつくるには、20年はかかる。つまり、長期のスパンで考える必要があり、その点で現代の傾向とは反対である。その意味で、環境に配慮したワイン作りは、グローバリゼーションへの対抗である。

フライブルクの南20Kmに位置するハイタースハイム（Heitersheim）にあるエコワイン生産者（ヴィルヘルム・ツェーリンガー・ワイン醸造所）は、「ドイツエコワイン連盟」の創設時からのメンバーで、ドイツで五指に入るエコワイン生産者であり、数々の入賞や表彰で高品質を認定されている。ケップファー氏は農業大学で高等ワイン醸造家資格を取得し、その後自然食品店に勤務をしたことが有機農法を活用した現職につくきっかけとなった。その時点で、品質はむろんのこと、「人間の生活の全体像」という意味で、有機農法が理想的であるという確信を持った。現在ドイツエコワイン連盟バーデン支部長。

2. 問題提起

い) グローバリズム（全球主義）とグローバリゼーション（全球化）を区別する

全球化は人類史の必然である、全球主義は利潤至上主義、覇権主義である

ろ) 全球化は社会的自己同一性としての地域の価値を（再）認識させる

自己の価値を再認識することが「地域興しの」前提、意識化とは言語化

cf. 「スロー運動」は全球主義への対抗だけでなく、自己の価値の主張である

は) 全球主義は大規模を原則とする 全球化における地域主義は「小ささ」に拠る

に) 全球主義の（一つの）武器は記号の暴力である 「生活世界の植民地化」

ほ) 地域の自立は記号の暴力への対抗と、独自の表現の創出にある

日本語作文における接続詞・接続助詞使用の特徴 －韓国人学習者の男女比較－

関山聡之（大韓民国釜山外国語大学校）

本発表では、韓国人学習者の自由作文における接続詞・接続助詞使用の男女比較を主題とする。

外国語を学習する学習者を分別するときには、学習時間等に基づいて、初級とか、中級とかに分けられる。しかしながら、大学の講義におけるクラスは、学年別の単位となっているため、学習者の学習時間やレベルに分けられてはいない。筆者が担当した「中級日本語作文」というクラスも例外ではなく、様々な背景を持つ学習者が混在している。そのような学習者に自由作文を書かせたところ、男性と女性の文章に使用されている接続詞・接続助詞に異なりがあることがわかった。

作文は、個々の特性を把握した上で指導できればこの上ない。しかしながら、これは、時間的・体力的に困難である。男女の異なりというものが、大学という様々な学習者が集まる場所で指導するときの何らかの基準になればと考える。

キーワード：作文 接続詞 接続助詞 男女比較 論理 思考

ペア会話を中心とした中級会話クラスの実践報告

吉金秀基 (釜山外国語大学校日本語大学)

本発表では、筆者が釜山外国語大学校で現在行っているペア会話を中心とした中級会話クラスの実践報告を主題とする。

ペア会話やペアワークは日本語教育だけでなくさまざまな外国語教育で行われているが、多人数クラスや学習者間のレベル差など、多種の条件が伴う韓国の大学の講義で、学習者主体の授業やピアラーニングを考慮に入れた授業をどのように行ったらよいかを検討するとともに、実践内容を分析する。また、国内の日本語教育や英語教育も含め、ペア会話やペアワーク、ピアラーニングの課題等を検討・比較し、考察を行う。

キーワード：ペア会話、ペアワーク、ピアラーニング、教師中心と学習者中心

苗代川地方伝来の朝鮮語学習書類の日本語について

片茂鎮（韓国・檀国大学）

薩摩苗代川(現 鹿児島県美山)に伝わる『交隣須知』や『隣語大方』『隣語大方』『講話』『淑香伝』『崔忠伝』などのような朝鮮資料は、大体において18世紀の対馬の藩儒雨森芳洲(1668~1755)による、対馬における朝鮮通事の関与が認められる。この朝鮮資料は時代言語を反映しているだけに、その日本語には方言という言語の地域性と、日本人にとって外国語(朝鮮語)の学習書としての特殊性が認められる。その日本語の方言性と特殊性について、すでに一部の言語現象と資料を用いて考察を試みたことがあるが(片茂鎮 2006a、2006b)、本発表では、前回対象外であった他の資料を対象にして、苗代川地方伝来の朝鮮語学習書類が共通して持つ言語現象を究明することにより、朝鮮資料における日本語の性格の一面を明らかにしたい。とくに今回は日本語の語彙と表現的な面を中心に検討していくことにする。

今回扱う文献資料と異本は次の通りである。

1. 『交隣須知』4巻 書写期不明(19世紀初?)、京都大学所蔵
2. 『隣語大方』の異本は次の通りである。
 - ・ 朝鮮刊本(10巻5冊) 朝鮮英祖14年(1790)
 - ・ 筑波大本(9巻) 宝暦元年(1751)書写
 - ・ アストン本(6巻2冊) 天保12年(1841)書写
 - ・ 京都大本(4巻2冊) 安政6年(1859)書写
3. 『漂民対話』は京都大本の上巻とアストン本の中・下巻を用いる。
 - ・ 京都大本(2巻2冊) 弘化2年(1845)書写
 - ・ アストン本(2巻2冊) 嘉永7年(1854)書写
4. その他、『講話』は京都大本(2巻2冊)、『淑香伝』(2巻2冊)と『崔忠伝』(1巻1冊)は沈寿官本を使うことにする。これらは書写期不明である。

<参考文献>

- 浜田 敦(1970)『朝鮮資料による日本語研究』、岩波書店
片 茂鎮(2005)『『交隣須知』の基礎的研究』、J & C (ソウル)
(2006a) 「「により」考」『表現研究』84、表現学会
(2007b) 「『交隣須知』日本語の特殊性」『比較文化研究』74、
日本比較文化学会

**韓瑞大学（韓国）日本語科における日本留学意識調査
(How many students want to go Japan to study?)**

公文素子（KUMON Motoko, 韓瑞大学専任講師）
motoko074@hotmail.com

世は、まさに国際交流真っ只中のように聞いています。大学や学生において、それらは具体的に留学（国費、授業料不徴収、私費）という手段や数によって見受けられるように感じています。しかし、私の勤務する田舎の大学では、大学間交流数も少なく、全学生中に占める留学生数は、以外に少ないのが現状です。

その理由として思い当たることには事欠かないのですが、一般的な「田舎である」とか「学生の能力に問題がある」という理由以外に、もっとおおきな基本問題として、大学の体制や教育のあり方に根本的な理由を感じるようになりました。

そこで今回は、日本語学科の学生にアンケートを取り、学生が留学という課題をどのように捕らえ、また認識しているのかを明白にすることを第一の課題としました。そしてそこから見えてくる外国語教育の諸問題、特に到達度レベルや動機付け、またその1つの目安でもある留学生の受け入れと送り出しに関する諸問題などを総合的に見てみようと考えています。

その結果、大学間交流協定等を利用したよりいっそうの交流と留学のあり方を模索し、改善策を見出せればと願っております。

学生の活発な国際交流と外国語学習の発展に結びつき、充実した学生生活の送れるようにするためには、大学や教員はどのような準備やバックアップ体制、並びに努力が必要なのかを考察していきたいと考えています。

新井白石と朝鮮通信使との交流について

鄭應洙(韓國・南ソウル大学)

1) 白石と天和使節(1682年)

此比よりぞ、對馬の國の儒生、阿比留といひし人をば相識ける、廿六の春、ふたたび出てつかふる身となりぬ、ことしの秋、朝鮮の聘使來れり、かの阿比留によりて、平生の詩百首を録して、三學士の評を乞ひしに、其人を見てのちに序作るべしといふ事にて、九月一日に客館におもむきて、製述官成琬書記官李聘齡、ならびに裨將洪世泰などいふものどもにあひて、詩作りし事などありし、其夜に成琬我詩集に序つくりて贈りたりき (『折りたく柴の記』)

2) 白石と正徳使節(1711年)

白石曰。公等奉使萬里。合二國之驩。雖則賢勞。豈不壯哉。若僕生。懸弧以來。譬如坐井。未嘗始望洋。初冠在壬戌之聘造諸貴邦二三君子。嗣後唐山琉球及大西洋歐羅巴地方。和蘭蘇亦齊意多禮亞人等至於斯。僕皆得見之。且今與諸公周旋有日于此。少償四方之志耳。
青坪曰。大西洋是西域國名。歐羅巴意多禮亞等國在於何方耶。
白石曰。貴邦無萬國全圖耶。
南岡曰。有古本。而此等國多不載。
白石曰。西洋者去天竺國。猶且萬里。有所謂大小西洋。僕家藏有圖一本。可以備觀覽焉。
南岡曰。果有所儲。毋慳一示。
白石曰。第恨其地名誌以本邦俗字。諸君難解。其凶義。在月令廣義。圖書編等書者即是。
南岡曰。吾邦無此書矣 (『江関筆談』)

3) 白石と享保使節(1719年)

余曰く、「白石公は恙なきか」。
儀曰く、「公は、なんぞもってこの人を知るか」。
余曰く、「辛卯年(一七一)の使臣平泉趙侍郎(趙泰億のこと)が、その詩草を得て帰り、余に示し、つねにその才華をたたえて止まない」。
儀は雨森東を顧みて曰く、「趙侍郎のゆきとどいた好意を感ずべし」と。また余に問う、「公はその詩をみて如何」。
余曰く、「婉朗にして、中華人の風調がある」。
儀は、手を頭にあて、謝して曰く、「昔、木下先生(木下順庵)の門下にありて白石とは同衿の友である。幸い君子の嘉賞を蒙り、かたじけない、かたじけない。ただ恨むらくは、その人が、病のため国事を辞し門を杜してすでに久しい。公がいま江戸に至らるるも、必ず見えることはなかろう」と。(『海游録』)

去年など朝鮮の學士來り候て老拙に逢候はむをこそ望に候ひしにあひ候はで歸り候は蓬萊に近よりて風のために引さられ候の恨に同じく候など申す事をさる人の序に志るし候事などと申す事も候 (『白石先生手簡』、佐久間洞巖宛)

高麗後期の漢詩文に見える自我認識と他者認識について
—扶桑の見える漢詩文を中心に—

金泰燾 (Kim Tae Do, 韓国・韓瑞大)

(1) 自我認識

- 1) 朋來自遠從今始, 門立扶桑海外人。 11-2 詩 (上達兼善尙書)
- 2) 北去提封連雷水, 東漸聲教入扶桑。 11-5 詩 (懷古)
- 3) 三韓賴與扶桑近, 捧日咸池照八埏。 11-9 詩 (獨坐)
- 4) 扶桑西畔一迂儒, 曾走中原老海隅。 11-33 詩 (自詠)
- 5) 投絨歸來東海西, 樽桑萬里碧天低。 11-19 詩 (即事)
- 6) 行行萬餘里, 繫馬扶桑枝。 13-2 詩 (乙丑九月。贈天使周倬)
- 7) 曉日照耀扶桑叢, 海波沸出珊瑚紅。綠雲冉冉動光彩, 下有突兀蓬萊宮。 13-2 詩 (重贈林主事)
- 8) 繼余馬兮扶桑, 悵何時兮與遊讌。 13-3 雜著 (寄浙東佩玉齋邨士安)
- 9) 回首扶桑一惘然。 14-下 詩 (感懷)
- 10) 日出樽桑照遍, 餘輝一幅丹青。 15-3 詩 (讚懶翁眞)
- 11) 扶桑出日明台嶺, 渤海洪濤接越天。 16-上 詩 (送胡若海照磨還台州東人詩話曰。讀此詩。其氣象可知矣)
- 12) 中興功業冠巖廊, 昭洗漢儀輝扶桑。 18 詩 (南行錄, 遣興二十八句)

(2) 他者認識

- 1) 日出處之天子兮, 奄宅扶桑之域也。 11-1 辭 (東方辭。送大司成鄭達可奉使日本國)
- 2) 扶桑翁發深省, 道根固心灰冷。 11-1 賦 (雪梅軒小賦。爲日本釋允中菴作號息牧叟)
- 3) 1) 扶桑吟: 詩題。 11-4 詩 (扶桑吟)
- 4) 須取扶桑大繭歸。 11-6 詩 (代友人送日本奉使)
- 5) 笑問扶桑翁。 11-6 詩 (萬峯 爲惟一上人題。日本人也。時奉使其國)
- 6) 新羅僧向扶桑去, 又道中原訪趙州。 11-9 詩 (送曹溪大選自休游日本。因往江南求法)
- 7) ① 遙遙阿每氏, 大業樹桑墟。
② 西國天開統, 東邦日出墟。 11-12 詩 (東國禮俗 近於春秋戰國 錄之所以進之也)
- 8) 島嶼抽青煙霧卷, 斬鯨餘響振扶桑。 11-12 詩 (紀事 2 首)
- 9) 賊船掃向扶桑去。 11-15 詩 (九龍山歌)
- 10) 扶桑日出思徐福。 11-16 詩 (獨坐)
- 11) 威聲震動扶桑日, 喜氣熏成撲地春。 11-25 詩 (聞羅, 沈, 崔三元帥舟師回。病不能郊迓)
- 12) 病發不時深閉戶, 想看風彩爍扶桑。 11-25 詩 (判三司事。領諸元師。追倭賊。將啓行。僕以病難於騎馬。惘然吟成 一首)
- 13) 樽桑國界我東邊, 利見臺高控海天。 11-20 詩 (睦二相與諸元帥發行。予以脚無力不能騎。闕於拜送。獨吟 二首)
- 14) 地近扶桑曉日紅, 但道神仙居海上, 誰知民社在天東。 13-1 詩 (洪武丁巳奉使日本作 其七)
- 15) 奉使遊桑域, 從人問土風。 13-1 詩 (洪武丁巳奉使日本作 其十一)
- 16) 遠自扶桑渡杳茫。 15-2 詩 (丙辰開九月。日本諸禪德來此。其叢林典刑。如我國之制。作一詩以贈)
- 17) 木道向扶桑。 17-2 詩 (送復菴游日東求法)

Jackendoff の言語モデル変遷

大岩秀紀（長崎外国語大学）

Ray Jackendoff は、1970 年代の生成文法理論の進展に寄与した言語学者であるが、現在のその言語観は生成文法のそれとは異にする。本発表では、Jackendoff の言語観の変遷を辿り、その言語モデルにおいて統語論と意味論、語彙と文法の関係がどのように位置づけられているかを見る。現在の主流である生成文法モデル（ミニマリスト・プログラム）と、Jackendoff の「三部門並列言語構造」との相違点を紹介したい。

キーワード：解釈意味論 語彙論的仮説 概念意味論 三部門並列言語構造

英語教育の可能性をジョン万次郎の生涯にたどる：
グローバルからローカルへ

堀口誠信（徳島文理大学）

ジョン万次郎は幕末期から明治期、ほぼ新島襄と時を同じくして日本の開国、西洋文明の吸収に尽力した立役者であるが、その功績はどちらかと言うと陰に隠れている感がある。例えば、下図は土佐で作成された記録本にジョン万次郎が収録した「テレグラフ（telegraph）の図」であるが、「書状ヲ鍼金（針金）ニ付ケ継場継場（中継場から中継場へ）へ飛バス図」という説明がついている。

ジョン万次郎自身は、「テレグラフ（telegraph）とは『雷の気』で物事を伝える機器」という原理を知っていたのであるが、当時の日本人に電信のことを説明するにはそもそも電気のことから説明しなくてはならず、とても理解してくれるわけがないと考え「針金に手紙を結びつけて中継地点の家に飛ばす」と苦し紛れに簡略化した解説をしたのである。

ここでカナが付けられている部分には、かの有名な万次郎英語が見うけられる。

「ポヲシタン」 = push down（電鍵を打つ）

「ソヲダ」 = sounder（電音発信器）

「フナベ」 = 「ツナベ」 = tune up（ダイヤルを合わせて同調）

このような中、ジョン万次郎自身は数々の幕末の重要人物などに効果的な英語教育を施したようである。寺子屋にも通っていなかった彼が、漂流民としていきなりアメリカというグローバルな舞台に降り立ち、はじめて文字を習得し（アルファベット）、そこから日本というローカル地点に戻ってきたのである。そのため、帰国後に漢字の書き方を練習した痕跡が多く残っている。彼の生涯から英語教育の可能性を具体的に追って行きたい。

新島襄のアメリカ体験：
「ローカル」から「グローバル」へ

石崎一樹・藤岡克則（徳島文理大学）

1864年、幕末の日本では池田屋事件や禁門の変が起こり、近代化に向けての変革期を経験していた。同じ年、新島襄は函館からボストンに向かった。このとき新島は21歳。10歳から漢籍を、14歳から蘭学を、さらに英学を学び始めていた新島は、当時の日本に対する憂国の情を深めるいっぽう、『聯邦志略』や『ロビンソン・クルーソー』、そして漢訳の聖書やキリスト教に関する文献を読み、西洋とキリスト教への関心を深めていた。

当時の開国寸前の「ローカル」な日本から一気にアメリカという「グローバル」へと漕ぎ出していった新島が、アメリカという国でどのような経験を積んだかについては様々な書簡においてつまびらかにされている。本発表では、強烈な知的好奇心を持ったままアメリカに渡り、10年にわたって学びの機会を得た新島襄のアメリカ体験を、とくに「ローカル」と「グローバル」という視点から概観する。明治六大教育家のひとりに数えられ、明治期以降の日本の近代化に貢献した新島襄の体験について考察を加えつつ、現代のグローバル化社会のありかたを模索するわれわれにとっての参照項目を示したい。

『もののけ姫』の自然観について

北村賢介（九州大学）

宮崎駿監督アニメ『もののけ姫』（1997年）の舞台となっている室町時代後期は、産業化が始まり、自然が開発されてゆく時代であった。スーザン・ネイピアに拠れば、作品の結末で、サン（もののけ姫）とアシタカは森と里で別々に暮し、アシタカはエボシが経営するタタラ場（製鉄所であるが、社会から差別されている病人や売られた女達の生活の場となっている）再建を助けると云う場面で作品は終わるが、それは、作品冒頭で攻撃された「工業化」が、とどのつまり、必要悪であると、認めざるを得ない事を暗示している。

キリスト教では、人間は万物の長として God に「エデンの園」の管理を任されたと教える。ここから、西欧キリスト教文化では、極端な自然保護思想と、その対極をなす自然開発が生じた。しかし、日本の神道文化では、人間を自然の上位に置く考え方はない。従って、神道文化が投影されている『もののけ姫』では、自然と人間は対等の関係にある。神道に於て、死は「汚れ」や「祟り」と関係するから、自然開発による自然の崩壊は、「祟り神」を生む。日本人の神観念が大事なのは、それが日本人の自然認識に関るからだが、本居宣長の「神」の解釈では、「よにすぐれて可畏きをば、神と云ふなり」であり、「祟り神」も人間に「祟り」を齎す力を有する「神」なのである。

「祟り神」を殺した為に、呪いを受け、死に至る痣を腕に持つアシタカに向かって、エボシは言う。「さかしらぶって、わずかな不運をみせびらかすな。」この台詞から解るように、エボシに取ってアシタカの痣なぞ、「わずかな不運」に過ぎないのだが、それはエボシには社会から差別されている者への同情があり、差別に苦しむ人々を救う為には「タタラ場」の建設が不可欠だからである。しかし、「タタラ場」は、製鉄の燃料として材木を大量に消費する為、森を荒らし、その結果「祟り神」を生む。

『もののけ姫』に於て、人間とは異質の世界（自然や超自然）に、人間との調和的な力は与えられていない。現代日本人の自然観、神観念を考える上で、『もののけ姫』は頗る有益な素材を提供してくれており、宮崎駿が『もののけ姫』制作にあたって利用した網野善彦の日本中世史研究や、G. B. サンソムの日本人論などを参考に、本作品の背後にある、現代に受け継がれている日本人の自然観について、近代日本の西欧化の問題と絡めながら考察する。

上海の李香蘭—衣装とパッシングのナラティブ

吉岡愛子（上智大学・青山学院大学非常勤講師）

李香蘭（山口淑子）は、1938年に満州映画協会から「中国人」女優としてデビューした満州生まれの日本人女性である。艶やかに中国服を着こなし、完璧な北京語や日本語の会話能力と美しい歌声で、日本、満州、中国など国境を超えて活躍した映画スターとして一世を風靡した。あまりに精巧な衣装ゆえに、戦後上海で李香蘭は、漢奸つまり、「中国人で、対日協力、対日通牒、本国反抗のような反逆罪を犯した売国奴」として、漢奸裁判に追い込まれる。スパイ容疑や日本の映画会社東宝や松竹、満映や中華電影（中華電影股份有限公司）と協力して、中国人でありながら日本のプロパガンダに加担した文化漢奸の罪を問われたのである。

李香蘭の民族衣装とパッシング（ここでは中国人になりおおせること）は、近代が執着してきた統一され安定したアイデンティティという解釈や差異の概念に挑み、二元的なカテゴリー、自己/他者、実体/外見、実像/虚像、スクリーン上/スクリーン外といった固定した境界を曖昧にしたり、超越したりする可能性を提示している。衣装やパッシングは他者性を取り入れ、可視化する行為であり、まさに自己と他者の境界を侵犯したり、融合したり、超えていく挑発的で転覆的な試みであり、時には衣装者に不安や疎外感などの自滅的な効果をもたらすものである。

衣装はまた新しいアイデンティティを創出するための技術でもある。まず著名な文化横断的な(cross-cultural)衣装者である李香蘭とアラビアのロレンスが新しいアイデンティティを創出するためにどのような技術を身に付け、実践したのかを比較検討してみたい。

さらに、李香蘭の漢奸裁判の舞台となった上海という地政学的空間について、李香蘭と映画『萬世流芳』の製作背景、上海映画界の動向、活字メディアとのかかわりなどを追いながら、上海映画人や『萬世流芳』自体の衣装性を考察する。

最後に、『萬世流芳』は李香蘭のアイデンティティの複雑さを非常に緻密に計算して描写した作品である。同時にこの映画の用意したナラティブが、結果的に李香蘭の衣装を中国人映画観客に強烈に印象づけることになり、漢奸裁判へ弾みをつける要因となったことも確認しておきたい。

心の支援の構造に関する考察(2) —宗教的アプローチとカウンセリング的アプローチ—

佐藤静 (宮城教育大学)

1. 問題と目的

佐藤 (2006) は、心の支援の構造を検討する中で、心理カウンセリングと牧会カウンセリングの比較を行い、両者は支援方法 (アプローチ) において対照的な位置にあることを示した。しかし河合 (1992) が指摘するように広義の心理療法は古来宗教領域において行なわれてきたのであり、人間は各種の神話や祈りによって心の支援を行ってきた長い歴史をもつ。その意味で、心理カウンセリングや牧会カウンセリングには通底する共通基盤があり、それは近代科学技術として発展してきた精神医学や臨床心理学の根幹にも関わる部分であると推測される。今回の報告の目的は、宗教領域における具体的な事例 (テキスト) をとおして、心の支援の構造に関する検討を深めることである。

2. 事例

今回とり上げる事例 (テキスト) は、新約聖書「ルカによる福音書」(7章 36-50節) の「罪深い女を赦す」と小見出しが付いた箇所である。これを選択した理由は、よく知られている物語であるとともに、いわゆる奇蹟譚ではない心の支援の例として、現実的観点から心の支援の構造的特性を検討する上で有益と考えたためである。このエピソードの史実性については問題としない。(物語の内容については参考文献を参照)

3. 考察

この事例 (テキスト) を三つの観点から分析・検討する。第一は罪と赦し、救いなどの宗教的教義をめぐる神学上の要素である。第二は物語のヒロインである「罪深い女」の内面に生じた心理的要素である。第三はこのテキストを読む者の内面に生じる心理的要素である。

第一の要素は支援の担い手の立場や機能に関連するものであり、テキストの中でもイエスの権威が直接問われている。次の第二の要素にも関連することとして、「罪深い女」本人にとってはそれが救いの根拠の一つになっていると推測される。第二の要素は支え手 (イエス) が示した受容と共感の態度によって「罪深い女」本人の内面に生じた救いと癒しの感情であり、心理カウンセリングの基本的アプローチと共通する。第三の要素はこの物語の読み手にもたらされる救いと癒しの追体験である。テキスト後半のイエスの語り (説教) の部分は宗教的教義に関する解説となっている。

この事例 (テキスト) では宗教的アプローチと心理カウンセリング的アプローチが混在していることがわかる。両アプローチの差異は、支援の担い手の立場や機能を保証する背景的構造に関係していると考えられる。

[文献]

河合隼雄 1992 心理療法序説, 岩波書店, p. 106

佐藤 静 2006 心 (こころ) の支援領域の構造に関する考察, 比較文化論No.24 (日本比較文化学会第 28 回全国大会発表抄録), p. 30

日本聖書協会編 2001 聖書/GOOD NEWS BIBLE (和英対照, 新共同訳), 日本聖書協会, Pp. 155-156

海外日本語教育実習における模索 (Groping for teach-practice in oversea)

奥村訓代 (高知大学)

高知大学人文学部では、1998年の日本語教員養成コース開設と同時に海外教育実習を重ねてきた。また、その成果を毎年冊子として公表してきた。

その冊子の内容は、参加学生の準備（事前学習）と本番、そして反省（事後学習）をまとめたものであった。

しかし、昨年度の中国における教育実習では、従来と異なる点2つを試みた。1つは、従来のオリジナルプログラムを止めて、受け入れ大学の教官個人の指導法やカリキュラムに学生2名程度を割り振りしたこと。2つ目は、教育実習生の授業を受ける受講者からの感想や意見を集約した点である。

本発表では、オリジナル型（高知大学オリジナルプログラム型）と今回の一般型（受け入れ大学教員のカリキュラムや対応による）との比較から、それぞれのメリット、デメリットを考察し、今後の日本語教員養成コースにおける海外教育実習の意義を再吟味してみたいと考えている。

- 具体的には、
- 1 日本語教員養成コースのあらまし
 - 2 海外教育実習実施の現状と諸問題
 - 3 オリジナル型と一般型の比較
 - 4 考察と課題

という内容で、日本語教員養成課程における海外教育実習の位置づけと意義について国際交流の視点からも考察してみたい。また、今後、海外教育実習をお考えの皆さんに対する話題提供や情報提供の場となり、同時に既に海外教育実習を開講されている機関や先生との情報交換の場になれば幸いであると願っている。

観光外客誘致の取り組みに関する一考察 —北海道ニセコ地域の成功例から—

伊藤優子（育英短期大学）

日本の観光政策は、1987年9月に「海外旅行倍増計画」（通称「テンミリオン計画」）を発表した。1986年に500万人程の海外旅行者を5年間で1000万人にしようという目標である。テンミリオン計画は、4年間で目標を達成することができた。2006年は1700万人もの日本人が海外に出国するというのが現状である。

しかし、海外からの観光客（インバウンド）はまだ発展途上の段階である。世界で第1位のフランスの7600万人というのは、突出している数字にしても日本は先進国でもインバウンドの数字は低い上、アジアの中でも9位という状況である。

2002年に小泉純一郎前首相が施政方針演説で、観光立国宣言をした。その中で、外国人旅行者訪日促進戦略の具体化が「ビジット・ジャパン・キャンペーン」である。2010年までに訪日外国人を1000万人にするという目標を掲げた。

各地で外客誘致の取り組みをしている中で、北海道ニセコ地域はオーストラリアからの観光客が年々、増加しているという。ニセコでの取り組みを現地で調査を実施した。その結果から、ニセコの成功要因、問題点、今後の外客誘致の方向性を探りたい。

小学校英語必修化問題に関して

高橋強（育英短期大学）

本来であれば本年度 2007 年から小学校英語が必修となるはずであったが、またも見送られることとなった。この点に関して小学校英語を必修化して効果的な英語教育を実施するにはどのような点に留意して実施に踏み切らなければならないのかを発表すものとする。

また実際に小学校に現場はどうか、発表者が学生を派遣している高崎市立城南小学校での取り組みの例を紹介することとする。さらに、各地方自治体で行っている小学校英語教育ならびに児童館やプライベートの英会話教室で行われている **Kids English** の指導実態などを発表者の視点や経験から述べてみることにする。ここで紹介するのはアルク高崎英会話スクールと井野児童館の例を紹介して、小学校英語教育の必修化問題について検討してみることにする。

さらには、日本の小学校英語教育に関する一般的な社会通念に関しても、述べてみることにする。例えば、現場の教員の小学校英語教育に関する考え方と子どもたちの親の考え方はどうか。それによると現場の教師と親の明らかなギャップが垣間見ることができるといえる。なぜなのか。またどの程度まで英語を教えればよいのか、中学校英語を先取りしても良いのか。テストの有無について、テストする必要があるのかどうか。小学校から中学校への橋渡しの問題、国際理解教育とはどのようなものなのか、自国の文化を教えなくて海外の文化を教えるのもよいのか。日本人の小学校英語教師と外国人教師とでは子どもたちはどちらから英語を教えてもらいたいと思っているのか、ここでも親の理想と子どものニーズに関するギャップが生まれるのである。英語が話せるようになるプロセスなど度外視して、親は英語ぐらい今の世の中話せないと困ると思っている。また、小学校からやれば必ず話せるようになるという妄想を抱いているのは明らかな事実である。この様な間違っただけの妄想を打破しなければいけないと思っているのは私だけなのであろうか。さらに、小学校でのニーズとカリキュラム開発はどうなっているのかなどを総合的に判断して小学校英語の必修化について発表すものとする。

探偵としてのダゲレオタイプ
—Nathaniel Hawthorne 作 *The House of Seven Gables* の場合—

中村善雄（長岡技術科学大学）

探偵小説史を紐解くとき、その最初を飾るのは、Edgar Allen Poe が 1841 年に執筆した “The Murders in the Rue Morgue” であろう。その主人公 Auguste Dupin は並外れた観察力を有し、その眼差しはカメラのレンズと称された。19 世紀末ロンドンの犯罪者と格闘した Sherlock Holmes も相棒 Doctor Watson によって、「観察する機械」と形容された。これらのカメラと探偵という組み合わせは歴史的に偶然のものではない。Poe の作品発表の 2 年前にあたる 1839 年にフランス人 Daguerre がダゲレオタイプ（銀板写真）を発表し、両者はほぼ同時期に誕生した。また Walter Benjamin が指摘するように探偵小説の成立には写真の存在が不可欠であり、その親和性は今日の探偵小説でも健在である。実際の警察機関のなかでも 19 世紀中庸にすでに写真の有用性が認識され、写真は（犯罪）事件自体を解読する手段として早くから用いられてきた。一方、本発表で焦点を当てる Nathaniel Hawthorne の長編 *The House of the Seven Gables* には銀板写真家 Holgrave が登場するが、本作品が探偵小説として取り扱われることはまずない。しかし、Ronald R. Thomas は、Charles Dickens の *Bleak House* と類似させ、Hawthorne のこの長編には遺産の行方や、失われた遺書、死亡事件、冤罪といった探偵小説的要素が織り込まれていることを示唆している。*The House of Seven Gables* における探偵の不在も、Dupin や Holmes といった探偵がカメラの眼を有することを逆手に取れば、逆に写真家が探偵的役割を担うことは可能であろう。そこに、銀板写真家 Holgrave が同時に探偵的役割を担う可能性のひとつが見出せる。

本発表ではさらに銀板写真家 Holgrave を探偵と見なす根拠を明らかにし、*The House of Seven Gables* を探偵小説として読むことの可能性を 19 世紀の犯罪学における写真の使用法を参照しながら考察してみたい。

学生の学習モチベーションを高める試み

熊抱ゆかり（福岡大学）

2006年3月に文部科学省が発表した、英語教育への取り組みとしての「英語が使える日本人の育成」では、中卒段階で英検3級程度の英語力（挨拶など簡単な会話ができる）、高卒段階で英検準2級から2級程度の英語力（日常の話題に関する会話ができる）を目指したものであった。大学に於いては、仕事で英語が使える人材を育成する観点から各大学で達成目標を設定する、というものであった。

果たして大学に於いて、仕事で英語が使える人材の育成が出来ているのだろうか。なぜなら日頃から、「大学生になって英語力が落ちた」と言う学生の声をよく耳にするからだ。そこで学生に英語の学習状況や各種英語検定試験について、また英語に関する幾つかの質問を含むアンケート調査を行った。

本発表ではその調査結果から、学生の英語学習の実態や英語に関する考え方などを検証する。また目的別選択クラスの導入で、TOEIC受験対策のテキストを使用したクラスに於いて、成績評価にTOEICの受験歴やその結果を加味することで、学生達の授業や受験へ向けてのモチベーションを高めることが出来るのか、試みた結果から検証を行うものである。

Organic Farming as Cultural Action: A Comparison of Japanese and U.S. Organic Agriculture

マーク・フランク (敬和学園大学特任講師)

The term organic has been applied to agricultural practices and products since the early 20th century. Systematic organic practices were popularized among agriculturalists largely through the writings of Sir Albert Howard (particularly *An Agricultural Testament* (1940) and *The Soil and Health* (1947)). Later, in the 1960s and 70s, such works as Rachel Carson's *Silent Spring* in the U.S. and Sawako Ariyoshi's *Complex Pollution* in Japan prompted a sharp increase in consumer demand for organically grown, chemical-free food. In Japan, the *teikei* agricultural movement was born in 1971 from a request by homemakers and mothers in the Kobe area for organic food. They contracted with area farmers to insure year-round supplies of safe and reliable organic food, while providing a degree of economic stability for the farmers as well.

In contrast, until the late 1980s and early 1990s, there were few comprehensive guidelines or government regulations defining what "organic" food actually was. To meet increasing consumer demand for easy-to-understand guidelines and to provide an international, standardized language for facilitating organic food imports and exports, a number of developed countries began implementing government definitions of organic at this time. As regulations were put into place in Europe, North America, Japan, Australia, New Zealand, and elsewhere over the next decade, a gap began to appear between regulators and lawmakers on the one hand and small-scale farmers who had been growing organically all along on the other. For example, in the U.S., USDA regulations have been criticized for being overly influenced by food lobbyists, particularly from the beef and pork industries. In both Japan and the U.S., costs of certification prevent some farmers from legally using the term "organic" to describe their produce, even though the processes used are in fact completely organic.

What has become clear in the post-war era of industrialized agriculture is that the way of thinking necessary to create an organic agriculture aimed at large national and international markets, with mandatory government regulation, is significantly different from that necessary to nurture and support a locally-centered, sustainable model of organic agriculture. Not surprisingly, this gap in philosophy and approach can be seen on a global level, particularly within the major industrial powers. It is perhaps too simple to refer to the dichotomy as a contrast between top-down and bottom-up approaches, but this description can help in identifying some key differences. Government-led, top-down approaches have been successful to a certain extent in defining what organic farming must not be, but offer little to address the question of what is *should* be. They can provide a clear economic model for production and distribution but without a deeper vision that made the work of Sir Albert Howard so revolutionary.

Over the past 70 or 80 years, a movement can be observed in the center of "organic" activity from researchers and soil specialists like Howard, to small-scale farmers, to grassroots consumer and local groups, to finally the level of national and international regulation. Concurrently, organic farming has changed from an essentially cultural action (dedicated to the sustenance of an ecosystem based in a specific place) to an economic and political action, with larger scale organic farmers worldwide enjoying greater profits from "value-added" certified organic food and export countries such as Australia gaining easier access to the Japanese organic food market. Beginning from the stance that organic agriculture is a cultural act, an international movement adapted to thousands of unique local environments, this presentation will examine how the concept of organic has been implemented, through both top-down and bottom-up processes, in Japan and the U.S. Particularly, the interactions of local culture, agricultural philosophy, and public policy will be addressed.

日中の輸出入に対する相互認識からみた両国の文化交流観 —北九州市と大連市の大学生を調査対象として—

岩松文代（北九州市立大学助教授）

【はじめに】日中の文化交流には久しい歴史があるが、現代では貿易や情報の流れを通してますます密接になっており、日中の多くの人々が両国の現代文化の交流に関わっているといえる。こうした日中文化交流は、実体としては、ある様式を形成しているであろうが、その認識においては、両国それぞれの目線が存在するはずである。そこには、両国の共通認識と相違点があると考えられるが、とくに相違点が大いではないかと推測される。本研究では、1980年代中頃に生まれた日中の20歳前後の若者が、両国の輸出入をどのように認識しているのかを調査し、両国の文化交流観を比較考察することを目的とする。

【調査方法】日本人大学生と中国人大学生に対して、問1「中国から日本への輸出品で日本文化に影響を与えたもの、こと、は何か。そして、どのような影響を与えたか。」、問2「日本から中国への輸出品で中国文化に影響を与えたもの、こと、は何か。そして、どのような影響を与えたか。」の2つの質問を行った。日本人大学生は、北九州市立大学の主に1,2年生（ごく一部に中国語専攻の学生はいるが、その他はとくに中国に関心がある層ではなく、いくつかの文系学部の学生）で、有効回答数は問1,2で各138名（問1,2は同一の学生）である。中国人大学生は、大連外国語学院で日本語を専攻する3年生（日本語学習歴は3年目で、日本事情や日本文化に関心がある）で、有効回答数は問1が83名、問2が81名（問1,2は別の学生対象。北九州市立大学の中国人留学生12名も各問に含む）である。

【結果と考察】中国から日本への輸出品について、日本の学生は「漢字」「仏教」「稲作」など歴史的な様式の影響を多く回答し、中国の学生は「農林産物」「原材料」などの物資で、現代の輸出品の回答が多い。日本から中国への輸出品については、中国の学生は圧倒的に「電気製品」「自動車」で、彼らが物心つく頃から日本製品が日常生活に与えたインパクトの大きさを記述している。日本の学生は、中国に輸出しているのは製品ではなく「技術」「先端技術」「機械技術」などの回答が多いのが特徴で、最も多い回答は「アニメ」「マンガ」である。このように文化に影響を与えた輸出入品について、両国の学生では回答のウエイトが異なっている。また両国の学生は、日本への衣服の輸出と中国へのファッションセンスの輸出、中国からの漢字の伝来と日本からの新たな漢字や概念の逆輸入も指摘している。

両国の文化交流観について、中国の学生は、日本の電気製品によって国産品は弱くなったが将来は技術力を得ていけるという輸入観、そして、日本文化は中国文化によってつくられた、日本への農作物で日本の食文化が豊かになったという自負する輸出観が特長である。日本の学生には、日本文化の基層に与えた中国文化の影響を大きな恩恵ととらえる輸入観がみられ、中国からの輸入量が増加しても、現代文化に影響を与えているとする回答は中国の学生ほど多くない。そして、日本の電気製品やアニメは、技術や雇用、日本独特の発想や感覚を伴って中国文化に影響を与えたとする輸出観がみられる。両国の観念の中には、中国は資源や歴史文化の源で、日本の加工技術と交流している関係性がよみとれる。

ハルビンと文廟

藪田謙一郎（同志社大学嘱託講師）

黒竜江省の省都であり、中国十大都市の一つに数えられるハルビンは新しい都市である。ハルビンの都市としての歴史の長さを語るのであれば、関内の諸都市はいうに及ばず、関外の都市でも瀋陽や吉林に比べて遜色があるといわざるを得ない。

このハルビンは、大連と同様に、ロシア人によって建設されたという歴史をもつ。二つの都市は、ロシアの中国侵略の拠点として建設され、経営された。大連は日露戦争の結果、日本の支配下におかれるが、ハルビンは日露戦争後も中東鉄道の付属地として発展を続け、ロシア革命の後にも白系ロシア人等の流入が続いた。その結果、1920年代初頭には、ハルビンの外国人人口は中国人人口を上回る規模に達した。

このような歴史が、ハルビンに「東方のモスクワ」、「東方の小パリ」といわれる独特の雰囲気を与えることとなった。中央大街(かつてのキタイスカヤ)、チューリン(秋林)公司、ハルビンビールなどロシアの影響を感じさせるものは今日でも少なくない。また、今日の道外区は、鉄道付属区とは異なり、一貫して中国側が行政権を行使していたが、この地区でも、鉄道付属地の影響を受けて都市建設が進められた。道外に残る「中華バロック」と呼ばれる建築は、ロシア人たちの建築に刺激を受けて中国人が作り出したものである。

この「東方のモスクワ」と称される都市に文廟がある。文廟は孔子廟ともいわれるが、その存在は中国の都市では珍しいものではない。明清時代の県城以上の都市であれば、文廟は当然あるべきものであった。だが、中東鉄道の建設とともに生まれ、百年余りの歴史しかない都市に文廟が存在することは、異例のことに属するのではないか。

このハルビンの文廟が建設されたのは1920年代後半、建設の中心となったのは東省特別区の長官であった張煥相、張景恵である。1920年代後半は、ロシア革命後、中国側による駐兵権、行政権などの回収が進み、基本的に主権回収がほぼ完成した時期にあたる。この時期に、あまりにハルビンが「西洋的」であるために、「中国的」なるものの象徴として奉天軍閥の手によって文廟が建設されたのである。

しかし、孔子と儒学が中国の偉大な思想的遺産であることは疑いを容れないが、孔子のみが中国を代表しうるわけでもない。まして、1920年代後半、孔子の権威は、三民主義と共産主義の挑戦を受けていた。ハルビン文廟を単純に中国ナショナリズムの発現と看做すことはできない。そこには、儒教という伝統的権威によって、社会変革の主張と結びついた中国ナショナリズムの潮流に対抗する意図があったと考えられるからである。

この報告では、文廟建設の背景として1920年代のハルビンにおける主権回収の過程を紹介し、あわせて、何故、文廟が「中国的」なるものの象徴として奉天軍閥によって選択されたのかを考える。また、中華民国期に建設されたが故に見られるハルビン文廟の特色を見ていきたい。

フランスにおける異国趣味の文化表現 —モンテスキュー『ペルシャ人の手紙』から 21 世紀ジャポニズムまで—

吉田 静（羽衣国際大学嘱託講師）

フランスは自国の文化に対し 17 世紀頃から国家レベルで明確な保護・推進政策を進めてきた。一方、民間レベルでは、イスラーム文化圏や中国、日本などの遠い異国の文化にインスピレーションを得て、文学・絵画・建築・ファッション・工芸品など、芸術から生活様式にいたるまで、積極的に異国文化の斬新さや情緒性をスパイスのように取り入れてきた。

1721 年、モンテスキューは書簡形式小説『ペルシア人の手紙』で、ヨーロッパを訪れた二人のペルシア人の目を通して当時のフランス社会を描き出した。意図的にナイーブな視線を異国人にもたせ、彼らが「先進国」フランスやイタリアの文化に驚きながら、自国と他国の相違を浮き彫りにしてゆく中、しだいに文化の真の意義を相対的に見いだしてゆく趣向になっている。「先進国」と自負していたフランスの読者にとっては、初めは優越感を感じながら読み進むも、その実、専制君主制の横暴に軋んでいる現実を、小説という娯楽の形をとって批判する、巧妙などんでん返しに、他者の視線に立ってものごとを考察することの重要性に気づかされる作品である。

19 世紀に入ると、フランスのみならずヨーロッパ各国でロマン派の作家や芸術家たちが、時間的・空間的距離を求めて古代や海を渡った異国の地に題材・背景を求めた作品が多く生まれる。フランスでは特に、トルコ、北アフリカ、中東に及ぶイスラーム文化圏を扱ったオリエンタリズムがエキゾチズム（異国趣味）の代名詞となるほど広まり、現代のフランス社会に日常的な要素となっているものもこの頃にその源となっているのではないだろうか。

1862 年に出版されたフローベルの『サランボー』は舞台も登場人物も全てカルタゴにあり、考古学者を思わせるフローベルの緻密な調査の上に、劇的な東方の世界を描いている。

19 世紀後半には東方趣味はさらに東へと進み、シノワズリー（中国趣味）、ジャポニズム（日本趣味）にまでいたる。19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてパリで数回開かれた万国博覧会に出展した日本と中国の工芸品は、マルコ・ポーロの『東方見聞録』で読んで想像を膨らませた極東の文化を、広くフランスの一般市民が実際に目の当たりにすることができ、また、我が物にすることができた、アジア文化普及にとって画期的な時期であった。

同時期、大量にフランスに輸入された浮世絵の技法が、セザンヌやロートレックなどの画家たちに大きな影響を与えたのは有名である。

この時期の日本趣味、中国趣味は主に工芸品にとどまり、文学や思想にまで関心が広まるのは 20 世紀に入ってからであり、しかも翻訳や専門の研究などが進むのは第二次世界大戦後である。日本の文学作品の翻訳数は 1980 年代以降、著しく増えている。仏訳された日本文学を読む人は増えたとはいえ、和歌を模したフランス語の詩の創造を試みる作品など、ごく一部で日本文学の影響をフランス人作家の作品に見受けることはできるものの、文学的に大きな影響を与えるまでにはいたっていないと言えよう。

しかし文学以外では、近年、黒澤明や小津安二郎をはじめ、最近では北野武などの日本映画の影響、ヌーベル・キュイジーヌに見られる懐石料理の影響、日本のマンガやアニメ、日本庭園に日本家屋、さらには畳や布団を取り入れた日本式生活様式など、フランスにおける日本文化の導入は飛躍的な勢いを見せている。インターネットでは「日本的-ZEN な暮らし方」と題されたホームページが開かれ、物から思考、趣味にいたるまで、ありとあらゆる生活場面に「日本的」な良さを取り入れるアドバイスを提供している。

現代は、知識層や芸術家たちを介して異国文化を取り入れる時代ではなく、一般市民が直接取り入れる時代であるが、そこには純粋な文化価値の導入ではなく、商品としての異国趣味の導入という大きな違いがあるように思われる。